

『大体こんな毎日』

作者 浅羽 一

買い物中に、女性店員さん（可愛い）からいきなり名刺を渡され「写真ください！」。遂に、遂に俺にも「モチ期到来か！」なんて興奮も束の間、新商品の宣伝用にお店のブログに載せたかったから、なんて。「あ、僕なんかの写真で良ければ幾らでも」とか何とか気取った感じで答えつつ、胸の内では人生なんてこんなもんだよなあなんてのんびりと頷く。

普段、どんな生活を送っているんですか。

そういう質問には大抵の場合、こんな具体例を頭に思い浮かべながら「いや、ほんま地味ですよ」と苦笑いを浮かべる。情けなくも愉快的な事実と、大人としてのたしなみと、オトコノコらしい強がりをごちゃ混ぜにして。要するに、大体そんな毎日のだ。

全くもってお恥ずかしい限りだ。と言うよりも、ある意味でいかにも現実らしい現実だ。

白馬の王子様を待ち続ける不毛さを知っているからこそ、白馬の代わりに赤い車を取り回す。しかも単なる赤じゃない。わざわざ限定色の白をオリジナルの赤に塗り替えてまで作った愛車だ。緑の中を颯爽と走り抜ける姿を想像したらもうそれだけで濡れてしまいたいじゃないか。何て言いつつ、深夜に一人で湾岸線を流しながら、だけどそもそも王子様からほど遠い我が身に呆れるよりも笑ってしまう。車内には洒落たBGMの他に男臭い失恋ソングや乙女チックな恋愛ソングも流れている。幸いにして、涙を流したことはない。

そう、泣く話じゃない。一人娘が嫁に行ったわけではなく、愛らしい娘が生まれたわけでもない。ましてや娘が死んだなんて悲劇もない。だとすれば素敵な娘さんと出会えないくらいどうってことない。おかげで振られることもない。でも、だからこそ、もしも娘さんが泣いていたりしたら、それは間違いなく不幸だろう。

行きつけのスイーツ店の店長が異動するからと、挨拶がてら寄った平日夜のショッピングモールをぶらついている時、ふと少女が気になったのはその姿勢が凍えているように見えたせいだ。クリスマスを目前にした大型店舗のベンチで一人、紺色パーカのフロントジッパーを首まで上げて、ベージュのスカートから伸びる黒タイトの絶対領域を擦り合わせるように足を閉じて、俯いた顔は薄茶の髪に隠れて表情を窺わせない。

強いて近づこうとしたつもりはなかった。ただ、それが両脇を種々の店に挟まれた通路の真ん中に設置されていた為に、自然とその前を歩く形になっただけだ。その瞬間、やや聴覚に意識を集中させはしたけれど。

彼女は泣いていた、明らかに。そして同時に怒っていた、痛々しく。

おそらく誰かと電話をしているのだろう、丸まった背中の下から漏れ聞こえてきたのは見ずとも涙を知る震えを無理矢理に押さえつけているような声だった。

ああ、彼氏と喧嘩でもしているんだろうな、足を止めることなくそう思った。勝手な想像だ。いつそ失礼な話だ。でも、多分そうだろうと思った。

格好と声から察するに十代、せいぜいが二十代前半くらいの華奢な少女が、華やかな飾り付けに囲まれた中心でぼつんと泣いている様は、一方的な意見が許されるのであれば不幸だと思った。それも、色んな出来事を不幸の度合い別にランキング分けしたら、かなり上位に載せても良さそうなくらい。

端から端へとショッピングモールを横断する一階通路には笑顔が溢れていた。ボディソープの専門店の前からは花の香りが漂い、人気のデザート店の前には柔らかい甘さが漂っている。ショーウィンドウでは雪をモチーフにされた飾りが並び、店頭のマネキンがフア

―付きのコートやブーツを着せられている。看板には〈クリスマス〉の文字が踊り、〈安くしたるから今すぐ買えや〉と字面こそ丁寧なもの、要するに同じ内容の文面が続く。きらきらと光るイルミネーションの数があたかもそのまま幸福の目安とでも言いたげに、これでもかこれでもかと色とりどりのLEDが建物の内外を問わずぶら下げられて貼り付けられて。敷地の半分を歩いた頃にはまるで初夏みたいにくっすらと汗がにじみさえする。小さな男の子がモコモコのダウンジャケットを脱ぎ捨てて妹らしき女の子とはしゃいでいる傍らでは、恋人同士と言った方がお似合いそうな若い夫婦が見守っている。そして自分はずま先の向きを180度変えた。

そろそろ帰ろうかなと考えていたことは、確かに理由の一つだった。だけどそれはあくまでも一部でしかなく、大半はやはり気になっていたからだ。下心よりも何よりも鼓膜に残る泣き声が引つかかっていた。

変に歩調を早めたりはしなかった。いないならいなくてむしろ喜ばしいことだとすら思っていた。そうでなくとも笑って、或いはせめて泣き止んでさえいれば十分だと。

果たして彼女は1ミリも動かさずそこにいた。写真から切り取ったかのごとく姿勢も右手を除けば全くそのままだった。そしてまた、相変わらず泣いていた。

おそらく周囲の人間で気付いていた者は仮にいたとしてもごく少数だったろう。ましてや立ち止まる者は男女問わず皆無だった。無関心を装って前を通り過ぎれば、ほんの二秒にも満たない間に鼻をすする音が二度聞こえた。

「あの、大丈夫ですか」

足を止めて腰をかがめ、分け目の綺麗な頭頂部に語りかけるように声を掛けた。

反応はすぐにあった。静かに上げられた顔は、とても小さく整っていて十二分に可愛らしかった。だけどその瞬間のこちらの感想と言えば、心の底から（…うわ。すげー号泣）。

「：大丈夫、です」

いっそ景気よく突っ込んでやりたくなるほど、大丈夫でない顔面と声で言う姿は、何と言うか予想していた以上に「不幸」だった。

あ、こらあかん。そう思った。そして同時にこんな時は甘い物しかないやろと改めて確信した。

再び俯いてしまった彼女から届く泣き声を後頭部に聞きつつ辺りを見渡した。

本音で言うとかウンター形式のアイス屋さんか理想だった。今の季節ならバナラ味のソフトクリームかイチゴ味のアイス―勿論、コーンが付いているタイプのやつだ―があれば完璧だった。

残念ながらすぐ側では、フレッシュジュースと和菓子屋とシュークリームの専門店が服屋の間で順に並んでいるだけだった。客待ちはどの店もなく、選択肢としては一択だろうと思わず苦笑した。

「いらっしやいませ〜」

「え〜と、今すぐ食べるんで、女子に一番人気の一つぶりいず」

厳密に言えば若干の違いはあるだろうが、ニュアンスとしては大体こんな感じのやりとりを売り場の男性店員と実際にして、勧められたものがパイ生地の上に甘いクッキーの欠片を振りかけられたシュークリーム（中身はカスタード）。ちなみに三種類のメニューの中で一番値段が高いものでもある。正直、女の子に喜ばれる一因はこの値段設定にもある

んじゃね、とは大人なので胸の内に秘めておいた。

店員がトレイに陳列されたシュークリーム皮の一つを取り、大きなレバーの付いた注入器でクリームを詰める。あらかじめクリームを入れてしまうと水分でふやけてしまうからだろう。だとすれば複数の味のクリームを揃えていないことにも合点がいく。なるほど、皮の食感や味の調和にこだわっている店なのだ。これならほんの少しは元気の源になってくれるかも知れない。そんな風に考えつつ、と言うかある意味で安心しつつ、財布を取り出しながらちらりと背後を窺えば――

―いつの間にか少女の隣に、途方に暮れたように、だけど膝先を彼女へ向けて無言で腰掛ける紺色ピーコート若者が一人。

……あれ、彼氏来てんじやん。

後になってから思い返してみても、あれほどまでにぽかんとしたのはこの一年で初かも知れない。とは言え、動きを止めていたのは束の間で、直後に会計担当の男性店員から「百七十円になりますよ」。

「あ、はい」

「ありがとうございます。三十円のお返しです。包み紙でお渡ししてよろしいですか」

まさか今更、しかもたった一個を袋に入れてくれと言える空気でもなく、って言うかもうすでに包み紙にくるんでるやんと言う指摘は大人らしく飲み込んで、「：はい、お願いします」。

やがて手渡されたシュークリームから薄紙越しに伝わるのは、かすかな温もりと、仄かに上るバニラの香り。そして彼女はベンチで俯き鼻を鳴らし、彼氏らしき男の子はその傍らで口をつぐみ、こちらはと言えばむき出しのシュークリーム片手に華やかな通路を屋外へ歩く。進む速度はクッキーくずでフロアカーパーットを汚さないように普通、よりもややゆっくり。

やがて二重になっている自動扉を出た途端、冷たい風が体を覆っていた暖気を綺麗に吹き飛ばす。さすが師走の夜風らしい。だけどかぶりついたシュークリームの中身はとろりと甘く温かい。

立体駐車場と店舗をつなぐ通路の端でぽつんと一人。うん、チョイスは間違ってたな、なんて達成感が残り香に続いて生まれてくる。さながらコントめいた状況は、悲哀よりも可笑しさが大きすぎて、それこそがつまり何よりも自分らしくて面白い。

(映画みたいには行かんあゝ)

ややタイトなブラックデニムに三十年物のブラウンレザーのライダース、ジャケット、そんな厳つい格好の男が、独り言の代わりに手の平サイズのシュークリームを口いっぱい。こんな出来事がたまにだったら凹みもするんだろうけれど、大体こんな毎日なのだから、きっと自分は幸せ者なんだろうと自然と思う。

もう後少しで今年も終わる。冷たい空気に星が映える。久しぶりに深夜ドライブに出掛けたくなる。

今日も自分は平常運転だ。